

# 郷土博物館・文学館だより

## 特別展

### 「本にえがかれた子どもたち 一町の子とも・村の子とも」

当館では3月22日(日)まで特別展「本にえがかれた子どもたち一町の子とも・村の子とも」を開催しています。

子ども向けの本や雑誌の出版は、大正期には全盛期を迎えます。ページをめくると、流行の洋服を着てピアノに向かう都会の子どもが描かれている一方で、子守りをしながら田植えの手伝いをする農村の子どももまた描かれています。この対照的な子どもの姿には、出版をになう作家や編集者の多くが「ふるさと」を離れて上京した人々であったことが関係しているといえるでしょう。渋谷にも、こうした児童書にたずさわった地方出身の作家が多く住んでいました。

本展では、大正から昭和にかけて出版された児童書や原画などの資料を展示しています。これらを紹介しながら、近代の都市生活者が求めたふるさとへの思いを読み取ってゆきます。



大正期の渋谷小学校 登校風景



本田庄太郎「ハツウマ」原画 (講談社所蔵)



展示会場の様子



大正期を代表する雑誌「赤い鳥」と「こどもの国」

## 江戸時代の学者

### はっとりなんかく 「服部南郭」

現在渋谷は若者の街として全国に知られていますが、江戸時代は畑や雑木林が広がるのどかな場所でした。渋谷区の東側にあたる場所には武家屋敷が分布しており、その多くが下屋敷と言われるもので、藩士が消費する野菜が栽培されたり、隠居所として大きな庭園が作られたりと、別荘的な要素が強い屋敷であったようです。

このような渋谷には、大名だけではなく、文化人も別邸を設けました。その中には、江戸中期の儒学者で、荻生徂徠の高弟として当時有名だった服部南郭がいます。彼は麻布の本邸とは別に、宝暦 7 年(1757)下渋谷村羽沢(現在の渋谷区東)に白賁墅(はくひしょ)と名づけた別邸を設け、ここで亡くなっています。

では、この服部南郭とはいったいどんな人物だったのでしょうか。

南郭は天和 3 年(1683)京都の富裕な商人の家に生まれます。母が歌人の山本春正の娘であり、父も和歌をたしなんだため、早くから和歌の才能をあらわしました。元禄 9 年(1696)和歌をもって身を立てるべく 14 歳で江戸に下り、18 歳頃には歌の才能をかわれ、柳沢吉保に仕官しました。

その頃、同家に仕えていた荻生徂徠と出会った南郭は、正徳元年(1711)ごろ、徂徠に入門し、古文辞学を修めます。古文辞学は、過去に作られた文章を正確に理解するため、当時の言葉にたち返り、正確な意味を解釈するものです。

そのため南郭は、中国の古典に大変通じ、後の活躍の基礎を築いたようです。

南郭は主君柳沢吉保が没すると、享保 3 年

(1718)主家を退き、以後仕官を生涯することはありませんでした。

享保 13 年、荻生徂徠が没すると、その門下の双壁といわれた太宰春台と共に徂徠の後継者として『徂徠集』の編集などに携わりました。

また、南郭は、中国明末に発行された『唐詩選』を他に先んじて日本で刊行しました。『唐詩選』は唐期の詩人を中心に優れた詩が選ばれており、江戸時代のみならず今日まで日本人に愛読されている漢詩集です。

この他に南郭は『唐詩選』の注釈書である『唐詩選国字解』や自身の作品集である『南郭先生燈下書』などを刊行しています。

また、南郭は江戸で芙蓉(ふきよ)館という塾を営みましたが、温厚な人柄と、詩人的天分の豊かさによって、門人は遠く山陽や、九州からも集まりました。

最晩年に渋谷で暮らしますが、その人柄を慕った弟子や友人が白賁墅を訪れたといわれています。



南郭肖像画



## 渋谷文学ウォッチング

### さ さ き くに 佐々木邦の『苦心の学友』

戦前の『少年倶楽部』の読者に、忘れられない作家を尋ねたとしたら、「佐々木邦」の名は必ずあがることでしょう。

邦は、明治16年(1883)静岡県駿東郡清水村に生まれました。大工の父親が国会議事堂建設の視察メンバーとしてドイツに派遣され、後に内務省勤務となったため、6歳の時に母親とともに上京します。

青山学院中学部、慶應義塾大学予科に進みますが学費が続かず、牧師の秘書をしながら明治学院高等科に編入して卒業します。

このころから、邦はマーク・トウェインをはじめとする英米のユーモア小説に魅了されるようになります。邦にはこれらを原書で読みこなす英語力が身につけていました。夏目漱石の『吾輩ハ猫デアル』『坊ちゃん』などにも感化を受けて創作意欲をかきたてられた邦は、本屋の丸善で見つけたアンソウン(無名)氏の *A Badboy's Day* を翻訳します。これが雑誌『明星』に「悪戯小僧日記」と題して明治40年11月から翌年10月まで連載され、42年には内外出版教会から単行本で刊行されました。

大正6年(1917)、慶應義塾大学予科教授に就任し、渋谷町豊分(現在の広尾)に暮らし始めた邦は、隣家に主婦之友社初代社長が住んでいた縁で、翌年から『主婦之友』にシムス原作の「主婦采配記」を連載します。これが評判となって、邦は作家としての地位を確立することになります。

その後、邦は昭和2年10月から『少年倶楽部』に「苦心の学友」の連載を始めます。その作品の朗らかさは、河目悌二の挿絵とともに読者の少年たちの心をとらえます。

「苦心の学友」の主人公、内藤正三君は、成績優秀であることを見込まれ、祖父の代に仕えていた旧藩主・花岡伯爵家の三男、照彦様のご学友に選ばれます。気持ちが優しくのんびり屋である反面、わがままなところもある照彦様に正三君は振り回されますが、持ち前の誠実さで学友としての勤めを見事に果たします。新旧の価値観の対立を織り交ぜ、社会風刺を込めながらも、温かな笑いでそれらを包み込んだ本作は、高い見識からユーモア小説を生み出した邦の代表作とっていいでしょう。

なお、正三君は渋谷に住み、父親は大蔵省に勤務する高等官という設定になっています。邦の住む豊分には、この小説のモデルとなったような一家が住んでいたのかもしれませんが。



『苦心の学友』 佐々木邦著 河目悌二画 昭和5  
大日本雄弁会講談社【復刻版】(昭和49 ほるぷ出版)

## 収蔵資料紹介

### 石 皿 (いしざら)



最大長 22. 9cm  
最大幅 9. 4cm  
最大厚 3. 3cm

食品の安全性の観点から食  
材が話題になる昨今ですが、今  
回はそれを調理する道具につ  
いてお話しします。

現在の調理具には、たとえば  
包丁やまな板、鍋、フライパン  
などいろいろな道具がありま  
す。では大昔の人、今から約二  
千五百年以上も昔の縄文時代  
の人たちは、どのような道具を  
使って食材を調理していたの  
でしょうか。

縄文人は、煮炊きなどをする  
道具として土器を使い、食材を  
切る包丁やナイフにあたるも  
のとして、黒曜石などの石を割  
ってできる剥片(はくへん)や、  
それを加工して作った石匙(い  
しざら)などを使っていますし  
た。また、まな板やすり鉢にあ  
たるものとして、石皿(いしざ  
ら)を使っていたようです。  
今回写真で紹介しているも  
のが、その石皿です。この資料

は、区内恵比寿二丁目にある豊  
沢貝塚から出土しました。

石皿には、河原によくある最  
大長が40〜50cmぐらいの楕  
円形をした平らな石が好んで  
使われます。その石の平らな中  
央部分に、食材を置き、手のひ  
らで握れるぐらいの大きさの  
敲石(たたきいし)や磨石(す  
りいし)などでたたいたり、す  
りつぶしたりして調理をした  
ようです。そのため良く使い込  
んだ石皿は、石の中央部が凹状  
になっています。写真の石皿も  
だいが使い込んでいて、かなり  
磨り減っています。しかも何か  
の拍子で割れてしまい、捨てら  
れてしまったようです。

石皿に使用される石材は、安  
山岩系のものが多く使用され  
ます。そのほかに緑泥片岩、砂  
岩、玄武岩などもあります。が、  
この資料は緑泥片岩製のもの  
です。

#### 【今後の展示予定】

特別展「本にえがかれた子どもたち  
—町の子ども・村の子ども—」

開催中 平成21年3月22日(日)まで

\*大正期に出版された本や雑誌を中心に展示して  
います。

#### 「短歌発表」

平成21年4月1日(水)〜15日(水)まで

\*第9回現代短歌募集の優秀作を掲示します。

企画展「昭和30年代の渋谷写真展

—「新修渋谷区史」資料写真から—」

平成21年4月18日(土)〜6月7日(日)まで

\*昭和30年代の渋谷の写真を展示します。

#### 白根記念

#### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00〜17:00(入館は16:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※10歳以上の団体料金

※60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3186-2791

郷土博物館・文学館だより vol.10

平成21年3月1日発行